

Title	岡部寛之著 保険学新講
Sub Title	
Author	庭田, 範秋
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.10 (1958. 10) ,p.921(81)- 926(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19581001-0081
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581001-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581001-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を獲得していたが、その他の労働者、たとえば鉄道従業員、パン焼き職人、化学工場労働者などは二交代十二時間労働というひどい条件であり、その他スコットランドの炭坑夫は、組合をもちながら十二時間を強制されていたほどであった。いわんや商店の店員の如きは、一八八七年の取締条令（The Shop Hours Regulation Act）によって、十八歳未満の者は七四時間に制限されたにもかかわらず、監督制度の不備のために実施されなかった。

このような状態に注目したトム・マンは、社会主義のための闘争の一部分として、八時間労働制の運動をおこそうと考えたのであった。

すでに、かのチャーチスト運動のより上る直前、オーエンのいわゆるグラント・ナショナルの運動のスローガンのなかに、八時間労働制の要求が見られ、その後第一インターナショナルにおいてマルクスがこれを強調し、その友アダム・ウィーラー（Adam Weiler）が労働組合総評議会（Trades Union Congress）においてこれととりあげながら、一八八三年まではほとんどがえりみられなかった。トム・マンの同志として、やがて一八八九年のドック・ストライキに際し、ともに指導的役割を果たしたジョン・バーンス（John Burns）ですら、これに賛成しなかった。しかし彼はこのような極端な革命至上主義者にたいし、その戦術的な誤りを指摘すると同時に、労働者大衆にたいしては、八時間労働制は、低賃金をもたらすのではなく、むしろ失業を減少させ教育のための余暇をあたえることを説き、労働者階級の間からの支持を得ようとしたのであった。こうしてやがて、一八八七年には八時間労働制は、労働組合や社会民主連盟からも支持をうるようになった。第四部の前半は、以上にのべたように、社会主義運動と労働組合運動とを結びつけようとした彼の努力についてのべられているが、その後半は、不熟練工の覚醒、いわゆる新組合運動において、彼がどのような役割を果たしたか、とくに一八九九年のドック・ストライキ以前において、社会民主連盟がおかした冒険主義的な行動——一八八六年のトラファルガー広場におけるデモンストレーションの失敗——にはじまる暴動的な事件にたいし、社会民主連盟の無計画性と教条主義に疑問をいだきながら、やがて北部ノーサンバーランドの炭坑地帯において社会主義を説いて廻り、みずからも社会主義者として成長してゆく過程が描かれている。

本書の最後の一節は、いわゆる新組合運動の絶頂ともいふべきドック・ストライキについて、その歴史的な意義、トム・マンをはじめ、ジョン・バーンス、ベン・ティレット（Ben Tillet）、アンニ・ベザント（Annie Besant）等の指導者の活躍について、きわめて生き生きと描写されており、その勝利にいたるまでの過程において發揮された不熟練労働者の革命的なエネルギーと、これを支援した国際的な労働者階級の運動の連帯性についてふれている。

「トム・マンとその時代」と題する本書のもっとも注目すべき特徴は、普通の伝記書に見られないほどの広汎な資料をもって、トム・

マンの生涯を物語ろうとしていることであるが、主人公の生活に關係する限りにおいて、その時代的な背景にふれるのではなく、イギリス社会運動史についてのべながら、その流れのなかにトム・マンの生活と闘争を浮き彫りにしようとするような意図が見られることである。すなわち、歴大な資料の引用をもってうづめられている本書をただ漫然と読んでみると、ともすればトム・マンその人を見失ってしまうことがある。この点が本書の一大特長であり、また容易に読了をゆるさない原因ではなからうか。もちろん本書の評価は第一巻だけでは軽々しくなされるべきではないが、要するに本書は、最近のもっとも読みごたえのある労作のひとつである。七〇歳を迎えてなお真理の探求に情熱をささげておられるドナ・トーア女史にたいし、筆者は心からなる敬意を表するとともに、本書の続巻が一日も早く出版されることを期待するものである。——一九五八・八・十二——

（飯田 鼎）

岡部寛之著

### 『保険学新講』

本書「保険学新講」の最大の特徴は、わが国の、そしておそらくは世界最初の、マルクス経済学の立場よりする保険学の書たること

書評及び紹介

である。このことは本書を読みかつ評するに際して極めて重視すべき事柄である。マルクス保険論の論文は、従来も在ることはあったが、一冊の書物となると絶えて見あたらない。本書は、「保険学方法論に初まり、理論保険学、保険史、保険政策の三篇、十七章（序一頁）の内容をマルクス理論という一本の糸で貫き通し、一応、殆どどの保険の問題を、そしてそれらを体系化して記述して、断片的な、個々の特別な問題についてのみのマルクス保険理論という従来のこの方面の研究とは、明らかに隔絶している。「理論的立場はいうまでもなく『資本論』の正当さに立脚して如何に保険を把握するかであり、そして一応経済学的にとりあぐべき、保険をめぐる諸問題についてはすべて取りあげて検討を試みた」（序一頁）とする著者の意図は、まずまず達成せられていると思われる。このことにおいて、本書は数多くの保険学の書物のうちにあつて傑出して輝くものである。好むと好まざるとに拘らず、マルクス保険学を学ばんとするものは、必ず、本書を、一度は通らなければならぬ。

本書は経済学の書物である。「理論保険学」、或いは「保険学原理」と題することも出来る」（序一頁）とされる本書は、「従来の保険論は学ではなくして、あくまでも論であり、保険に関する知識の寄せ集めにしかならない」（序一頁）、その「保険論を竿頭一歩進めて、経済学の一分野としての保険学の地位にまで引き上げんとする」（序二頁）。確かに本書の全篇は保険に関する経済学的思考に終始され、旺盛している。保険史、保険政策の部分が鮮少に過ぎると

いう批判は在りえようが、しかもなお、あらゆる本書の読者は、その保険の経済理論に瞠目を禁じえまい。本書は保険学の書物として勿論であるが、経済原理の書物としても一応の評価を受けることは確実であって、「保険学の発展に寄与することが出来れば」(序二頁)という著者の希望は十分に達成せられていよう。

本書は斬新なる書物である。著者はその保険論の「展開の過程に於て従来の保険論との懸隔を明らかにするために必要な限りこれが批判を加え、然る後に自説を展開すること」(序一頁)としている。「説ききたり展開する理論は、これごとく従来の保険学説とは全く異った新らたなる説である」(序一頁)。従来の保険学説または理論を批判して、新しい学説と理論を打立てる、この意味においては勿論であるが、従来のそれらとはおおよそ別個な、マルクス理論という新体系において、つまり全然別な、創造的な学理に基づく保険の書物であるという点で斬新なのである。従来の学説・理論の延長と発展において新奇であり、従来の学説・理論と別性格において驚異である。

本書「保険学新講」の最大の欠点は、その説かんとする理論の嚴密性の欠除である。なるほど「それはやゝもすれば顕微鏡的詮索にのみ終始している従来の学問に対する研究態度を臆却して、たとえ大雑把でもよい、荒削りでもよいから、ともかく体系的、有機的な学説を打ち建てる、その上で室内装飾をほどこすべきであるといふ」(序一頁)著者の考え方に依拠するとはいっても、やはり本書

の本質を学問の書たる点に求めんとするならば、このことは決して看過・是認さるべからず、短所と指摘されてもやむをえぬところであろう。本書の各所に見られる記述の雑駁さや表現の不鮮明さはいわずもがな、前後・随所に発見される論理の矛盾、理論の齟齬、内容の不統一と体系の紊乱は、マルクス保険学の今後の発展の蹉跌となり、これが評価を誤解に導くものとして、ぜひ訂正・是正せられることが要求される。

西藤雅夫氏は、「彦根論叢」の第三十二号で、本書を書評されているが、筆者のこの書に対する見解と、ある点では同一であり、若干の部分では相違している。西藤氏は本書を「特異の立場に立ち、特異の体系を持つ点で、きわめて注目すべき著作である」として、「本書が触れているいくつかの問題は、従来の保険学から見れば、たしかに新しい課題を提供したものと見ることができよう」と。そして著者の「野心的な態度」を指摘して、「従来の保険学に挑み、そういう理論の展開のうちに、おのずから一つの体系が組立てられている。その意味では、清新の風を吹き入れた、ということができると述べて、高く本書を評価しながらも、すぐに続けて、「そうであるからとて、この体系が、理論的に十分に整っているとい得るであろうか」との疑問と不満を示されている。しかし西藤氏は、本書の最終的評価を、すこぶる重く高く置かれているようであり、よしんばこれらの欠点を本書に見出すとしても、「もとよりその故を以て、本書の価値が減せられると見るべきでない」。結論とし

て「伝統的保険理論に対して、本書が特異の地位を主張していることは事実である」と。西藤氏の本書に対する諸評価と諸批判については、筆者も一応賛成といふことができる。

西藤氏は本書の主たる欠点を、そのよるところの文献の性格と数の多少に見出されているようである。そして著者の本書執筆の企図が、「この企図が、果して嚴密な理論体系のもとに、達成せられたか否かは、読者それぞれの批判に委ねらるべきであろう」とし、「本書が、何らかを示唆すること」を重視して、西藤氏が本書の主張と「ある点では同意しつつ、他面見解を異にする」ゆえか、その理論の不嚴密性と体系の不十分に、批判と反対の重点を置かれなかったのは、筆者の、西藤氏に、なんとしても嫌らないところである。

「理論の展開は、あくまで独自のものであるべきであり、その意味では、文献は常に重要であるというわけではなからう。しかしながら、いやしくも新しい理論は、古きそれらの理解批判から、慎重に出発しなければならぬのであるから、できるだけ多くを内外の学説に求めるといふことは、学問的態度として望ましい。このことは従来わが国の学者がえてして陥つたような、外国への追従もしくは紹介の卑屈さを意味するものではない」。西藤氏のこの言葉は、実に正しい学問的態度である。そして本書の著者がマルクスやヒルファードィングをしばしば引用したのは、一面では西藤氏の上記の言葉に従っていることとなる。西藤氏も「著者の立場の特色から考えまことに当然のことである」と是認せられている。しかし、「し

かしながら、その反面に、その他の内外の文献に触れるところが、必ずしも多くはなく、ことに、外国の文献については、殆んどこれに触れるところがない。ややもの足りないのである」と論じられているが、ここでいう西藤氏の外国の文献とは、具体的にはなにを指しているのであろうか。「本書に於ては、既に明かなように、従来保険が学として充分でなかったこの分野に、経済学としての保険学の地位を築こうという著者の意図」を、すでに西藤氏は容認せられ、「従来社会経済より遊離、抽出され、個体として把握されて来た保険を一切否定して、もっぱら資本主義経済そのものとの関連から、保険の本質を明かにしよう」とすることに賛成され、そして、「そういう見解は、保険学が経済学である限り、著者をまつまでもなく、きわめて当然のことである」と明記されている西藤氏は、さらに続けて、「問題は、あたかもその資本主義経済そのものが、どのような本質を具えているかという点であり、それへの経済的な関連が、如何なる機構を持つかという点にある」。さてこのように見れば、著者がその引用する文献において、つねに主としてマルクスやヒルファードィングに終始し、既存の保険学の文献には殆んど立脚しなかった、またはしえなかったという点は、理解できないのではないだろうか。実際、筆者も、勿論浅学非才が最大の原因ではあるが、マルクス保険学に関する内外の文献を殆んど知らない。保険経済学は、そしてマルクス保険学は、従来の保険学と相違することあまりに大である。先人未踏の学問分野である。少いう

ちにもできるだけ内外の文献を漁りつつ、文献の不足という研究上の障害を克明していく、これがマルクス保険学徒の途であろう。

本書の最終的評価は、それは読む人々の見解によるであろう。斬新という点においては突出である。特異という点においては孤立である。新理論を築き先立って主張したるがゆえに、やや内容・体系に杜撰であった。しかし西藤氏もいわれるように、さらに研究が進められ「著者みずから述べられているような顕微鏡的でない理論の体系が、一層みごとに打ち建てられる」ことが実現したとしたならば、それこそわが国の保険学界にとって一大進歩と称することができよう。理論の斬新性と嚴密性、保険学が真に学問としての地位を主張・確立・保持するためには、やはりわれわれはこの二つのどちらをも放棄することは許されない。

本書「保険学新講」の保険学方法論に関する部分は、マルクス経済学の立場よりして賛意を表しうる。また保険の分類に際しては、著者が経済学的分類と称して、保険を不変資本、可変資本および剰価値の保険と大別し、さらに詳細に細分している個所は、若干の問題点を蔵して、にわかに対応し兼ねないまでも、極めて示唆と啓示に富むものとして大いに研究の価値あるところである。なお本書の本趣とは関係はないが、十一頁の「——恋愛ですらも保険の本質に因する穿鑿ほどには人間を愚物にはしなかつた——」なる冒頭の文句は、学術書としては無意味・悪趣味なる記事であり、また剰価値

値はこれを剰余価値とするのが、わが国の現在の学界の定説である。

「保険とは信用制度一般の基礎の上にたつて、偶然の事故の場合に危険を負担するを内容とする信用という商品を組織し、実現させるところの特殊の資本主義的企業である」。この著者の保険の定義は、特色があつて研究に値する。しかし理解し難い諸点を含むものである。まずこの定義は保険商品説の一種であつて、これからして筆者は同意し難い。また保険業が特殊の資本主義的企業であるとすれば、それは領けるが、保険が、保険そのものが、保険の本質が企業であるとするのは、いかなるものであるか。さらに信用という商品を組織し実現させるという表現も、決して適切ではないであらう。商品を組織するとは、どういふことか、商品を実現するとは……このことは商品の生産・製造ということと同じなのか、またはどのように相違するのであらうか。

著者みずからは理由の在るところではあるが、保険を商品、よしんば仮装的商品としても、これを商品の一種・ある種として執えることには疑問が存する。保険会社は保険という商品を販売するという著者の本書中の言葉と、保険資本は貨幣取引資本の一種であるという、同じく著者の本書中の言葉とは、矛盾しないかどうか。このことは保険労働の本質論を巡つても再度問題となつてくる。

保険労働に関する著者の研究は、保険労働の不生産性より始まっている。しかし商品を組織し実現する労働である保険労働は、不生産

的労働ではないといえないだろうか。著者が保険労働は保険という商品販売Ⅱ生産に充用せられる労働者としているところは、やはりこの矛盾と疑問の一つの現われではないだろうか。商品販売Ⅱ生産なる表現は不鮮明であり、理論の理解を素す可能性がある。保険労働の章では、保険という商品なる表現が全面的に使用されている。仮装的という修飾語がとれて、また保険なる商品が生産Ⅱ販売といったような表現も見られるが、他の部分・個所での販売Ⅱ生産という表現と、この二つの出現はいかなることを意味するのか。販売と生産なる語句がⅡなる記号を挟んで前後することに、なにか特別なまたは特殊な意味あるいは理由が在るのであらうか。生産過程Ⅱ流通過程という表現も、学問としてはあまり適当ではあるまい。

保険利潤の本質の部分は、マルクス経済学よりして肯定しようところである。著者はこの章において保険費用を純粋流通費用として明確に把握されている。

経済準備説批判の項では、著者の印南博吉氏と近藤文二氏を交えて、かつて活潑に論争を闘わされたところで、大いにわが国保険学界を刺戟したところであり、それらの著者の諸論文の趣旨が収録されてある。いまだ論争の結論は出ていないようであるが、今後、ぜひ解決していただきたいと希望される。

保険の資本主義的役割なる項では、保険の生産性説を批判されている。著者は保険の生産性を否定されているが、けだし正当なる結論である。ただ著者も含めて一般にそうであるが、マルクス保険理

論を展開する場合、なぜ流通費用論として始められないのか、または流通費用論の点から主力・重点を置かれぬのか、筆者の疑問とするところではある。再生産と保険、再生産における保険の役割等は、今後一層研究が進められて開拓されるべき問題であらう。本書のこの部分は、なかなか意義深いところであらう。

保険と社会的予備の問題は、前章とともに今後の研究を待つべきところ大なるものである。本書のこの部分もまた意義深い。これは筆者の寸感であるが、保険の経済準備を巡る問題も、この辺からしての研究を推し進めていくことによつて、解答の一つの可能性が見出されるのではなからうか。保険資本の運動法則の研究・その社会総資本との関係の把握。

保険と価値論のところでは、まず保険の商品性を改めて問題としている。すでに述べた通り著者の保険の商品性に関する主張は、ややあいまいで矛盾を含み、批判を受け、疑問を持たれているところである。そしてここで保険を生産するとか保険の生産とかの言葉が散見されるが、してみると保険資本は貨幣取引資本ではなくて、生産資本となりはしないか。とにかくこの場合、生産という用語は妥当でない。またここでは保険の個別的価値、市場価値、市場価格が論じられているが、保険の商品性の是認に結局は淵源するのであるが、生産Ⅱ販売、需要Ⅱ供給、供給量Ⅱ生産量、需要Ⅱ販売といった、従来からある種の学者間に使われたことのある、あまりスッキリとしない・あいまいな表現形式が出てくるが、これはマルクス

保険学にあつてはぜひ廃止したい。やはり保険を流通費用として理解し、保険資本を貨幣取引資本、保険労働を不生産的労働と規定して理論を追求すれば、上記のようなあまり学問的純粋性のない表現を克服することができよう。

保険資本の集中集積のところでは、独占資本の理論が土台となつて、銀行資本のそれと保険資本のそれとの比較がなされ、それらの相違・関係が示されている。

保険と景気変動に関しては、従来も多くの学者が研究を重ねてきたが、十分なる成果をあげなかつた。本書の本章もこの方面の研究の一里塚とはなるう。保険と景気変動の問題は、統計的な数字を通して、一応具体的に把握してみる必要が大である。

本書の第二篇の保険史、第三篇の保険政策の部分は、第一篇の理論保険学に較べて、明らかに本書においては従たる位置にある。この方面の研究は、マルクス保険学にとっては、大なる未開の分野をなしている。

さて筆者は、本書「保険学新講」と岡部寛之氏、ひいては西藤雅夫氏の諸説にまで、みずからの分をも顧みず、非礼にも数々の批判をなさしていただいたのであるが、厚く寛恕を願うところである。しかし筆者がなした諸批判が、そのまま全体としての本書への筆者の価値評価そのものを現すということではない。筆者は、総体として、本書を稀有にして貴重なる書物と認めるものである。さらに一段と、その体系・内容が整理・強化されたならば、その時こそ、本

書はマルクス理論に則る保険経済学の書物として、広く一般の追隨と比肩を許さざるものとなるう。(著者は経済学博士、拓殖大学にて保険学、経済政策、経済史の講座担当、住友生命調査課長、本書は序二頁、目次六頁、本文二四四頁、B6版、保険研究所、三九〇円) (庭田 範秋)

武山 泰雄 著

### 『アメリカ資本主義の構造』

——寡占経済とその社会意識——

現代の資本主義体制や社会主義体制は、それぞれのもつ基礎理念をもつては端的に割り切れない数々の要素を包括している。つまり、我々が過去に使用してきた尺度では測りえない何物かが、その異質的な姿をもつて随所に現われて来ている。アメリカ資本主義にしてこそである。かつて、スリクターは、アメリカ経済を、被用者グループの利益関係が他のそれよりも特に重要視して運営されるとして、労働経済 (Laboristic Economy) と規定しようとしたし、アレンは資本に対する経営の優位をみて、資本主義というよりは経営主義 (Managerialism) というし、またサミュエルソンも、国家の経済への参画をとらえて、混合経済 (Mixed Economy)

販売競争に移ることが説かれる。

第四章 寡占経済とマーケティング。販売面での競争はマーケティングの隆盛を招く。管理価格に対抗して、大量安売り方法のスーパーマーケットやディスカウント・ハウスが発達、その結果公正取引法が崩壊にひんする。

第五章 ビッグ・ビジネスとワシントン。経済と政治との結び付き、圧力団体中最も有力な財界団体の実態、その勢力からもたらされるビッグ・ビジネスへの特恵待遇、補論として、原子力の平和利用とビッグ・ビジネスのねらいが説かれる。

むすび アメリカ体制の展望。アメリカにおけるビッグ・ビジネスのヘゲモニーは圧倒的であり会社国家への途が開かれる怖れがあること。完全雇用の達成とインフレの抑制という二目標のうち一つは犠牲にされて来たし、景気循環の消滅も薬観に過ぎないこと、機会の国といわれた程の社会的流動性が停滞しつつあること。労働組合も労働者の生活水準向上によって現状維持的意識にむしばまれていくことが指摘されている。以上が大体の骨子である。

もとより本書は純理論的な観点に立つものでも、アイデオロジカルな分析視角によるものでもない。したがってそれらを求めることは、いささか筋が違ふし著者にとつても迷惑なことであろう。しかし通読してみれば、著者の観察がかなり批判的であることが明瞭となる。寡占経済がそれ自身功罪二面を有していることとは別に、かかる経済が既定の事実として君臨し、アメリカ民衆の上に政治・経済・

と定義している如く、観念の少しのずれから種々の性格が浮彫りにされてくるのである。これらの是非はしばらくおくとしても、かかる事態を招いた事実とその理由を看過しては、現代経済の理論的分析に大きな欠陥を与えることになるであろう。アメリカは、今日最も代表的な資本主義国である。それ故、資本主義体制を理解する上には、このアメリカ資本主義の諸相に十分に目を向けることが必要である。「日本経済新聞」ニューヨーク・ワシントン特派員として勤務した四年にわたる著者の体験から結実したこの書は、豊かな経験と広汎な文献を通じて観察されたアメリカ資本主義の実態研究とも称すべきものであり、その点で我々にとって極めて有益なガイドの役割を果すものといつて良からう。

まず本書の構成は次のようである。

第一章 寡占経済とその倫理。ここでは、ビッグ・ビジネスによる寡占の実態、その歴史的形過程、経営者の新しい倫理が述べられる。

第二章 寡占経済の経営・支配の構造。マネジメントの発展に伴う経営組織の変化と現実の在りかた、支配の構造と支配の執行機関との関係およびこの二者を峻別すべきこと、福祉資本主義といわれるものの内容に触れる。

第三章 寡占経済下の競争。アメリカの繁栄を保つものは、大量生産——大量信用——大量販売——大量消費というプロセスであること、また寡占経済下の競争は管理価格の普及によって新製品競争、